

都城市文化財調査報告書 第68集

横市地区遺跡群

# 平田遺跡A地点・B地点・C地点

—横市地区県営経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告書—



平田遺跡遠景(南東上空より霧島を望む)

2005年3月

宮崎県都城市教育委員会

# 序 文

本書は、「横市地区県営経営体育成基盤整備事業」に伴い、受託事業として都城市教育委員会が発掘調査を実施した横市地区遺跡群の概要報告書であります。

都城市では横市地区県営ほ場整備事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が平成8年から継続的に実施されており、これまでに数多くの成果が報告されています。

平成15年度は、平田遺跡A地点の発掘調査が行われ、弥生時代中期から後期にかけての集落跡が見つかり、当時の集落の様相が見えてきました。特に周溝状遺構から多量の炭化米が見つかったことにつきましては、新聞等を通してご紹介してまいりました。

平成16年度は、A地点の東側と北東側にあたるB地点およびC地点の調査を行いました。B地点では弥生時代の集落をはじめ古代・中世の遺構が数多く見つかっており、またC地点からは中世の水田跡をはじめ弥生時代の集落も見つかっています。

本書の刊行によって、都城市の文化財に対する理解と認識が高まることを願うとともに、今後の学術研究の発展に少しでも寄与できれば幸いです。

また、発掘調査に従事していただいた市民の皆様や、周辺住民の皆様をはじめ、関係各機関の方々には多大なご理解とご協力をいただきました。心より感謝の意を表します。

2005年3月

都城市教育委員会

教育長 北 村 秀 秋

## 例 言

1. 本書は、「横市地区県営経営体育成基盤整備事業」に伴い都城市教育委員会が平成15年度および16年度に実施した平田遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 平成15年度にA地点を、B地点とC地点については平成16年度に調査を行った。
3. 本書ではレベルは絶対高を用い、座標は国土座標を用いた。
4. 現場における遺構実測は、作業員の協力を得てA地点を栗山葉子・下田代清海・津曲千賀子が、B地点を栗山・津曲・天野玄普が、C地点を山下大輔・原田亜紀子・天野が行った。なお、遺構実測図および遺物出土分布図の一部を有限会社ジパング・サーベイに委託した。
5. 遺構の写真撮影については、A地点を栗山・下田代・津曲が、B地点を栗山・津曲・天野が、C地点を山下・原田・天野が行った。また、遺構の空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。
6. 本書に掲載した竪穴住居跡および周溝状遺構は1/50の縮尺となっている。遺構配置図については本書の体裁によりA地点が1/800、B地点が1/600、C地点が1/400となっている。
7. A地点・B地点の遺構番号は通し番号である。また、調査の都合上、SA10・20・21・37は欠番である。
8. A地点で出土した炭化米の同定は株式会社古環境研究所に委託した。
9. 本書の執筆は1章・2章・3章の1～3節を栗山が、3章の4節を山下が、編集を栗山が行った。
10. 本書で使用した遺構の略記号は以下のとおりである。  
SA：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SC：土坑 SD：溝状遺構  
SF：道路状遺構 ST：周溝状遺構 SW：水田
11. B地点・C地点は、本書作成段階で調査中のため、遺構数および時代については平成17年2月末現在のものである。
12. 発掘調査で出土した遺物とすべての記録は都城市教育委員会で保管している。

## 本文目次

第1章 序説	1) 調査の経緯と経過	1
	2) 調査組織	2
第2章 遺跡の位置と環境		3
第3章 平田遺跡の調査		
第1節 平田遺跡の概要		4
第2節 A地点の調査		5
第3節 B地点の調査		12
第4節 C地点の調査		16

## 挿図目次

第1図 遺跡分布図	3
第2図 周辺地形および調査区域図	4
第3図 A地点遺構配置図	7
第4図 ST02実測図	9
第5図 SA02実測図	9
第6図 B地点遺構配置図	13
第7図 C地点遺構配置図	17~18

## 写真目次

1. 土層堆積状況 (調査区西壁)	10
2. 北西部遺構検出状況 (西南から)	10
3. SA18完掘状況 (南から)	10
4. SA27完掘状況 (北東から)	10
5. ST02完掘状況 (北から)	10
6. ST03・03・06・07・08完掘状況 (奥から03・04・06・07・08) (南東から)	10
7. SB05半裁状況 (南から)	10
8. SC79 (右)・80 (左) 遺物出土状況 (南から)	10
9. ST07出土甕	11
10. SA18出土鉢	11
11. SA24出土鉢	11
12. SA18出土長頸壺	11
13. ST03出土壺	11
14. SC80出土壺	11



15. ST03出土器台	11
16. SA23出土ミニチュア土器	11
17. SA04出土土製紡錘車	11
18. SA27出土石包丁	11
19. SA16他出土土製勾玉	11
20. 平田遺跡A地点(左)、B地点(右下)、C地点(右上) 全景(南から)	14
21. B地点全景(南から)	14
22. 中世 SD01・02完掘状況(東から)	14
23. 中世 SD06完掘状況(南から)	14
24. 古代 SD05(左)・SD04(右)(東から)	14
25. 古代 小型壺出土状況	14
26. 古代 SB30(左)、SB29(中央)、SB32(右)(西から)	14
27. 古代 SS01(南から)	14
28. 弥生 SA42(東から)	15
29. 弥生 SA33及びSB09(北から)	15
30. 弥生 SB08(手前)、SB11(左奥)	15
31. 弥生 土器溜まり	15
32. 弥生 ST10(南から)	15
33. 弥生 ST10土器出土状況	15
34. 縄文晩期 土坑	15
35. 縄文早期 SS04	15
36. 調査区全景(中世水田跡検出状況)	19
37. 調査区西側土層断面	19
38. 中世水田跡検出状況	19
39. 中世水田区画完掘状況	19
40. IV層中検出家畜(牛)の足跡	19
41. 家畜(牛)の足跡検出状況	19
42. 家畜(牛)の足跡完掘状況①	19
43. 家畜(牛)の足跡完掘状況②	19
44. 中世水田跡②および溝状遺構	20
45. IV層中出土鉄製品	20
46. SA01出土磨製石包丁	20
47. 包含層出土磨製石包丁	20
48. SA01(左)、SA04(中央)、SA02(右) 検出状況	20
49. SA01検出状況	20
50. SA03検出状況	20
51. SA04検出状況	20

# 第1章 序 説

## 第1節 調査の経緯と経過

宮崎県都城市横市地区では、平成5年度に県営ほ場整備事業（平成9年度から平成13年度まで県営担い手育成基盤整備事業、平成15年度からは県営経営体育成基盤整備事業）の実施が採択されました。平成6年度宮崎県北諸県農林振興局から文化財の所在の有無について照会を受けた宮崎県文化課が事業区域一帯の分布調査を行ったところ、事業対象区域170ヘクタール内において、10遺跡、約44ヘクタールに及ぶ埋蔵文化財包蔵地の所在が確認されました。その後、都城市教育委員会は、宮崎県文化課が実施した試掘調査の結果を受けて、北諸県農林振興局と協議を行い、平成8年度からは記録保存のため、緊急の発掘調査を行っている。なお、平成16年度までに発掘調査を行った遺跡は以下の一覧のとおりである。

遺跡名	所在地	調査面積	調査年度	主な時代と成果
鶴喰遺跡	都城市横市町	8,100㎡	H8・9年度	古墳時代の集落跡 中世の館と水田跡
肱穴遺跡	都城市横市町	15,000㎡	H10年度	縄文時代～近世の集落跡と水田跡
今房遺跡	都城市横市町	3,110㎡	H11年度	弥生時代の集落跡、中世の水田跡
馬渡遺跡	都城市蓑原町	9,900㎡	H11・12年度	弥生時代の集落跡 平安時代の居宅跡
坂元A遺跡	都城市南横市町	2,800㎡	H12年度	縄文時代～近世の水田跡
坂元B遺跡	都城市南横市町	6,300㎡	H12年度	縄文時代～近世の集落跡 中世の畠跡
江内谷遺跡	都城市蓑原町	3,100㎡	H12年度	平安時代の集落跡、中世の館跡
加治屋B遺跡 (第1次調査)	都城市南横市町	11,000㎡	H13年度	弥生時代の集落跡、中世の館跡
加治屋B遺跡 (第2次調査)	都城市南横市町	10,000㎡	H14年度	弥生時代・平安時代の集落跡 中世の館跡
星原遺跡	都城市南横市町	6,500㎡	H14年度	縄文・古墳・平安時代の集落跡 古代畠跡
平田遺跡A地点	都城市南横市町	14,000㎡	H15年度	中世の畠跡、弥生時代の集落跡
平田遺跡B地点	都城市南横市町	6,200㎡	H16年度	弥生時代・古代・中世の集落跡
平田遺跡C地点	都城市南横市町	6,200㎡	H16年度	弥生時代集落跡・中世水田跡

平成15年度の調査対象は平田遺跡A地点で、約14,000㎡の範囲が切土によって削平されるため発掘調査を行った。調査期間は平成15年4月10日～平成16年3月29日までである。調査期間中に小学生・一般を対象とした遺跡見学会を実施し、約150名の参加があった。

平成16年度の調査対象は平田遺跡B地点およびC地点で、あわせて12,400㎡の範囲が切土によって削平されるため、発掘調査を行った。調査期間は平成16年4月9日から平成17年3月31日までである。平成17年3月12日に一般を対象に遺跡調査報告会を実施し、約90名の参加があった。

## 第2節 調査組織

### 平田遺跡A地点（平成15年度）

- 調査主体者 宮崎県都城市教育委員会
- 調査責任者 教育長 北村 秀秋
- 調査事務局 文化課長 井尻 賢治  
文化課長補佐 坂元 昭夫  
文化財副主幹 矢部 喜多夫
- 調査担当者 文化課主事 栗山 葉子  
文化課嘱託 下田代 清海・津曲 千賀子
- 調査指導者 宍戸 章（宍戸地質研究所）、田崎 博之（愛媛大学）、村上 恭通（愛媛大学）  
山村 信榮（太宰府市教育委員会）、山本 信夫（山本考古研究所）

### 平田遺跡B地点・C地点（平成16年度）

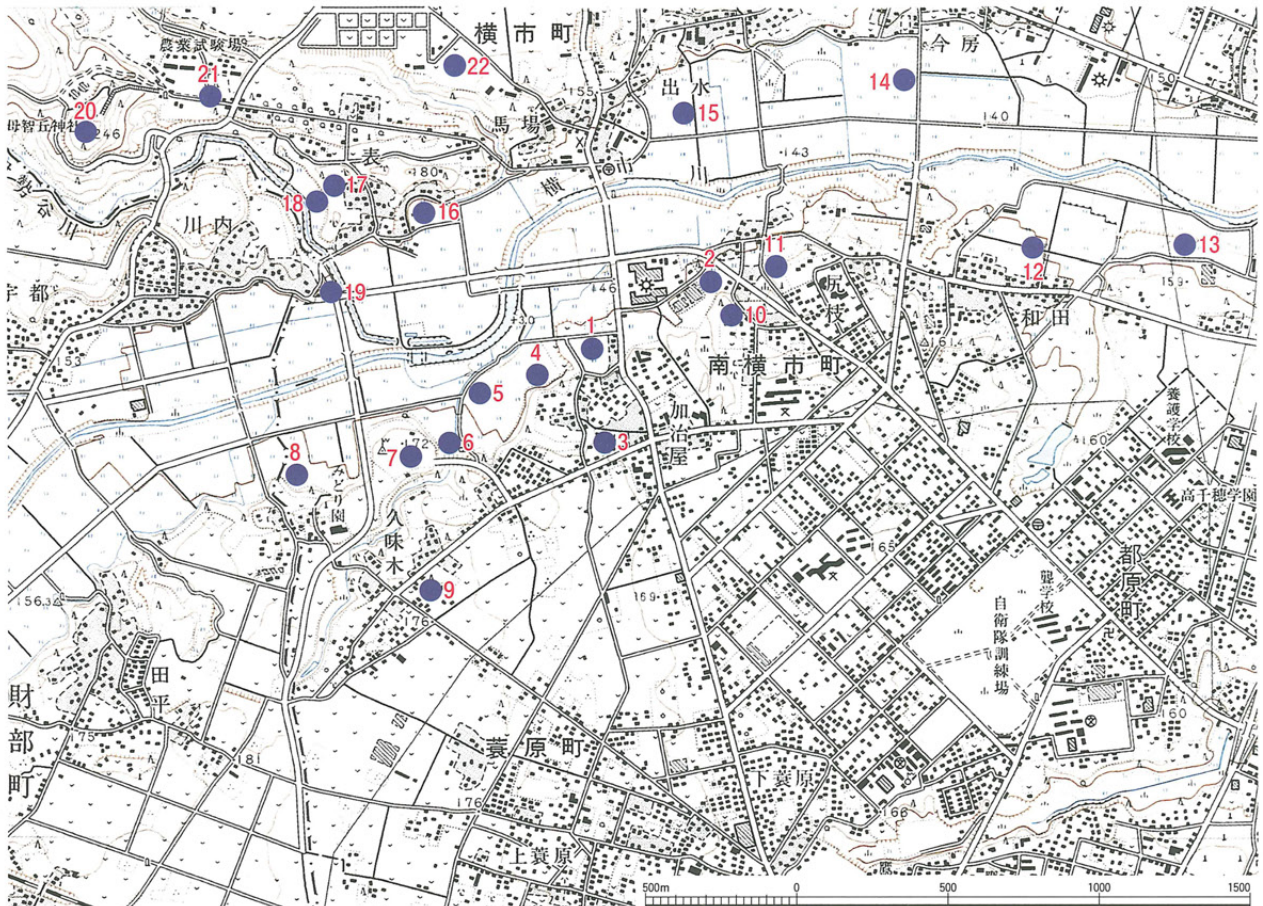
- 調査主体者 宮崎県都城市教育委員会
- 調査責任者 教育長 北村 秀秋
- 調査事務局 文化財課長 稲丸 満文  
文化財課長補佐 坂元 昭夫  
文化財副主幹 矢部 喜多夫
- 調査担当者  
（B地点）文化財課主事 栗山 葉子  
文化財課嘱託 津曲 千賀子・天野 玄普（平成16年12月まで）  
（C地点）文化財課主事補 山下 大輔  
文化財課嘱託 原田 亜紀子・天野 玄普（平成17年1月より）
- 調査指導者 伊藤 晃（岡山県文化財センター）、宍戸 章（宍戸地質研究所）  
丹治 康明（神戸市教育委員会）、堀田 孝博（宮崎県宮崎県埋蔵文化財センター）

## 第2章 遺跡の位置と環境

都城市は九州東南部、宮崎県の南西部の都城盆地中央に位置する。盆地は北東を諸県丘陵、東から南にかけては鰐塚山地に、北西を霧島火山群、西を瓶台山・白鹿山に囲まれており、地溝状の窪地となっている。東側の地形は起伏に富み、山地から流下する河川によってその麓は開析し、扇状地を形成している。西側の山地は盆地底にかけて緩やかに傾斜する。また、盆地中央を多くの支流を集めながら大淀川が北流している。その支流の一つである横市川は、霧島山麓を源とし、鹿児島県財部町を経て蛇行しながら都城市中央部へと流下し、大淀川に合流する。

横市川流域は河岸段丘と氾濫原が形成されており、現況は水田が広がっている。この横市川両岸には、横市地区遺跡群と称される遺跡が多数存在し、当遺跡もこの遺跡群に含まれる。

平田遺跡は南横市町字和田に所在し、横市川右岸の成層シラス（二次シラス）台地である蓑原台地北端から東流する横市川へと傾斜する低位段丘面上に立地する。A地点・B地点は同じ段丘面上に位置し、地形としてはA地点からB地点へ向かい緩やかに傾斜している。またC地点については、A地点・B地点より一段低い段丘面上に位置し、調査区の下層からは湧水が認められる。



- 1 : 加治屋 B 2 : 星原 3 : 加治屋 A 4 : 坂元 B 5 : 坂元 A 6 : 江内谷 7 : 中尾山・馬渡  
 8 : 馬渡 9 : 池原 10 : 田谷・尻枝 11 : 胡摩段 12 : 平田 13 : 早馬 14 : 今房 15 : 脇穴 16 : 鶴喰  
 17 : 新宮城跡 18 : 畑田 19 : 母智丘谷 20 : 母智丘原第1 21 : 母智丘原第2 22 : 牧之原第2

第1図 遺跡分布図

## 第3章 平田遺跡の調査

### 第1節 平田遺跡の概要

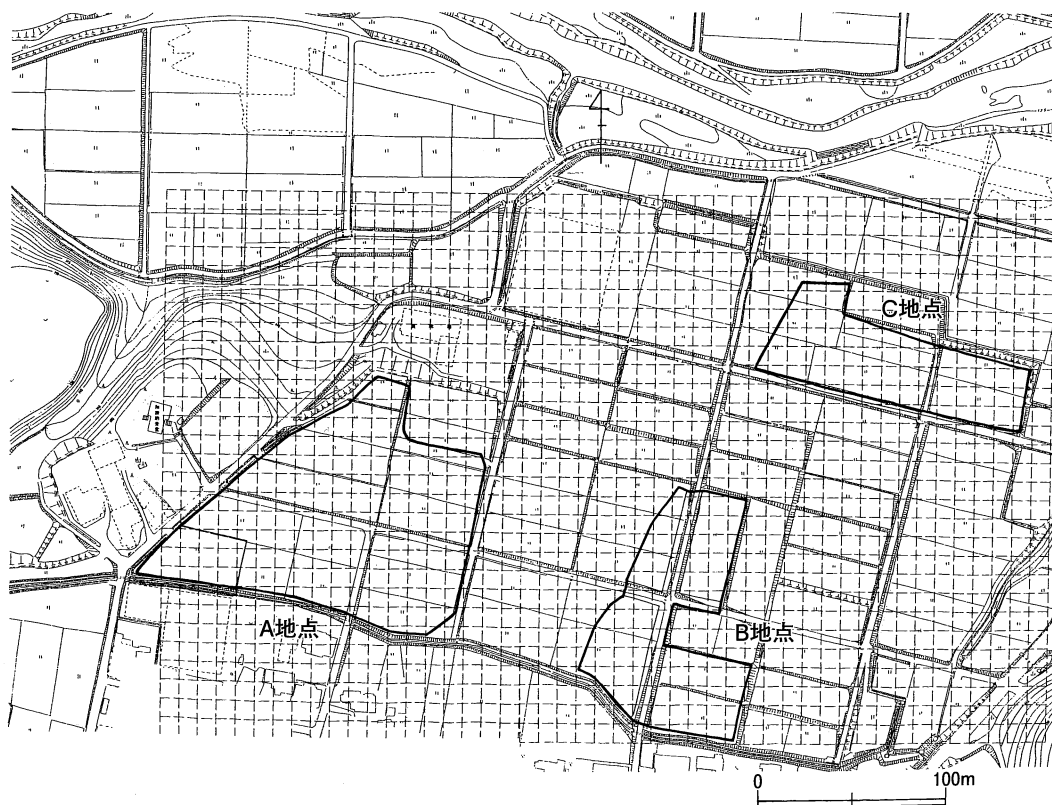
平田遺跡は県営経営体育成基盤整備事業に伴い平成15・16年度の2ヵ年にわたり、併せて約26,400㎡の調査を行った。内訳は、平成15年度にA地点（約14,000㎡）を、平成16年度にB地点（約6,200㎡）・C地点（6,200㎡）の調査を行った。

A地点とB地点については昭和40年代に行われた耕地整理によって、特にA地点では中世から古代の遺物包含層と思われる層の大半を削平され、B地点では、調査区の南東約1/4を御池軽石層（約4,200年前に霧島御池より噴出）まで、調査区北側を御池軽石層下まで削平されており遺物・遺構の残存状況は必ずしも良好とは言えなかった。C地点については15世紀前半に桜島より噴出した文明軽石が良好に堆積しており中世以前の包含層が残されていた。

A地点では弥生時代中期から後期にかけての遺構が多く検出されており、また、古代から中世と思われる遺構も見つかっているが、当該期に属すると思われる遺物はほとんど見つかっていないためこれらが属すると思われる詳細な時期は不明である。

B地点では縄文時代早期・晩期、弥生時代中期から終末、古代、中世と幅広い時代の遺構・遺物が見つかっているが前段に挙げたように調査区の大半の遺物包含層が削平されていたため、遺構・遺物の残存状況は良好とはいえなかった。

C地点では中世の水田跡・溝状遺構・掘立柱建物跡をはじめ、弥生時代の集落跡が見つかっている。



第2図 周辺地形および調査区域図



## 第2節 A地点の調査

A地点の調査面積は14,000㎡で、標高は約148mから150mである。調査区中央が小高い尾根状を呈し、中央から北西に向かいやや深い谷が始まっている。また、調査区中央から東に向かい緩やかに傾斜し、北側は小谷を挟み緩やかな高まりが見られる。その他にも無数の小谷がみられる。遺構は調査区中央の尾根状部分と北側の緩やかな高まりを中心にみられ、弥生時代中期から後期、古代から中世にかけての遺構と遺物が見つまっている。

A地点の土層堆積状況は、表土および近・現代の耕作土の下にⅢ層の文明軽石層（15世紀後半に鹿児島県桜島より噴出）が調査区北西の谷部分で認められたが、良好なものとは言えず、ほぼ等間隔に半月状に残されていることから文明軽石噴出時に埋没した畝間に残されているものと判断した。その下にパミスをほとんど含まない粘質の黒色土であるⅣ層が存在するが、これも調査区北西谷部分を除いては削平されていた。調査区全域で認められたのはⅤ層の黒褐色土である。Ⅵ層の御池軽石（霧島御池より約4,200年前に噴出）を多く含むのが特徴で、弥生時代の遺物はここから出土する。Ⅴ層は全体としては黒褐色であるが、下位に行くにしたがってⅥ層の含有率が高くなり褐色化していく。弥生時代の遺構検出面はⅤ層中の黒褐色と暗褐色の境である。

### <古代～中世>

遺構としては、古代から中世に属すると思われる道路状遺構(SF) 2条・掘立柱建物跡(SB) 1棟が挙げられる。調査区北西の谷付近で、畝跡の一部（Ⅲ層埋没の畝間）については、残存状態が悪く写真撮影と断面実測にのみとどめた。

古代から中世に属すると思われる道路状遺構はR-10～12にかけて東西方向に伸びていた。溝状の掘り込みの底面に幅約50cmの硬化面が見られた。遺構内から遺物は出土していないため詳細な時期は不明である。硬化面のみの道路状遺構も調査区西側で南北方向に伸びていた。

掘立柱建物跡が調査区中央南で1棟(SB01)見つまっている。東半分が削平されているため規模は2間×1間以上である以外は不明である。ピット内から土師器が出土している。

Ⅲ層の文明軽石が埋没する、幅・深さとも1.5m～2m程ある土坑が点在したが(SC05・37・40・41・60・78・85)、機能・用途は不明である。その他に大小さまざまな土坑が多数見つまっている。

### <弥生時代>

遺構としては、竪穴住居跡(SA) 25軒・周溝状遺構(ST) 8基・掘立柱建物跡(SB) 6棟・土坑7基が挙げられる。

#### ・竪穴住居跡

竪穴住居跡の平面形態は方形・円形・花卉状と様々で、規模も4mから9mを超えるものまでみられる。また、主柱穴は1本～8本である。時期は弥生中期末から後期にかけてのものが主体である。主な竪穴住居跡の概要は下記のとおりである。

SA02は調査区東に位置し、規模が約5m×6mで方形のベッド状のテラスを持ち、主柱穴は2本で東側の柱穴からは弥生中期末に属する山ノ口式土器の甕の脚が出土している（第5図）。

SA04は調査区北東に位置し、規模が約7m×8mの方形を呈す。埋土の状況から1回目の住居が埋没する途中で掘り直され、住居が東側へ拡張されていると考えられる。頸部に暗文がある壺が出土している。

SA13の大きさは7mから8m程で円形のプランを呈す。東側から西側にかけて階段状に下がるベッド状のテラスをもち、柱は四隅に1本ずつと中央に1本の計5本である。大量の頁岩チップとともに磨製石鏃やその未製品・剥片が出土し、住居中央付近からは台石兼砥石が出土していることから、この住居は磨製石鏃

の製作を行った場と考えられる。土器はほとんど出土していないが山ノ口式土器や中溝式土器が出土している。

SA16は調査区南端に位置し住居の半分以上が調査区外であるため詳細は不明だが、規模は約7mと思われる。住居内からは山ノ口式土器・中溝式土器のほか土製勾玉が出土している。

SA18は平田遺跡A地点で最大規模の花弁状住居で、調査区のほぼ中央の小高い尾根上の先端部分に位置し、規模は9mを超える。中央に6本の柱、南の花弁の端に2本の計8本の柱を持つ。住居内からは炭化材が多く見られ（特に柱穴付近）、長頸壺や鉢形土器など多数の土器や石器、軽石製品が出土し、ベンガラが住居南隅から検出されたほか南側の柱穴からは埋設されたと思われる土器も見つかっている。

SA27の大きさは7mから8m程の後期初頭と思われる花弁状住居で、4本柱で中央に土坑を持つ。調査区南西端に位置し、住居内からは後期初頭と思われる土器や石庖丁・磨製石鏃、炭化米・炭化種子（コナラ属）及び炭化材が出土している。また、未焼成の粘土が数箇所の小ピットの中から見つかっているほか、3cmほどの小礫が住居北側で集中して見られた。また、南隅の小ピットからは埋納されたと思われる土器も見つかっている。

#### ・掘立柱建物跡

弥生時代に属すると思われる掘立柱建物跡はSB02～07までの6棟である。

SB02・04が調査区の南側に位置し、SB03～07が調査区北側に集中する。SB02は約半分が削平されているため正確な規模は不明であるが、残存しているだけでも1間×2間である。

SB04は1間×1間である。SB03は3間×3間の棟持柱を持つ。

SB05が3間×4間の棟持柱をもつもので、柱間が1.2m程、径・深さが0.5m程のものである。棟持部分を入れた建物の最大長は約8mである。SB05の南に位置するSB06・07は1間×1間とほぼ同規模のものである。

#### ・周溝状遺構

周溝状遺構8基の平面形態は、ほぼ隅丸方形である。規模は、5mから6m程で、溝幅が0.5m～1m程、深さは10cm～50cmである。また、各周溝状遺構内の深さも均一ではない。周溝状遺構の時期は中期後半から後期初頭と考えられる。ただし不明が1基（ST01）ある。周溝状遺構のうちST01・08以外の埋土中からは炭化米が出土している。ただし、ST01については、炭化米の存在を認識せずに調査を終了し、遺構内の土を採取していないためST01における炭化米の有無については不明である。ST08については、採取した土を分析中である。主な周溝状遺構の概要は以下のとおりである。

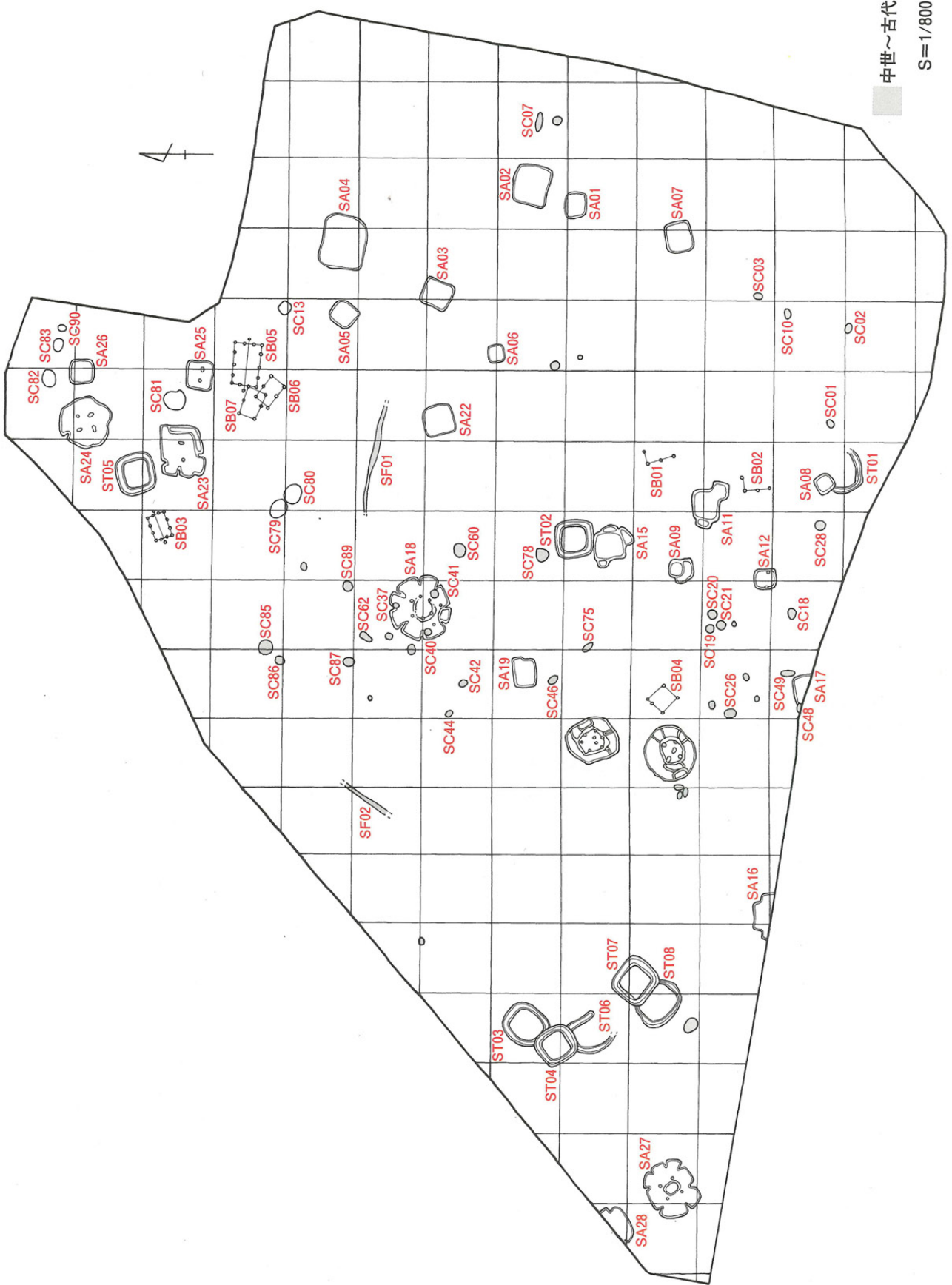
ST02は調査区のほぼ中央部に位置し、規模は約4.5×4.4m、溝幅0.6～0.7m、深さ約0.5mの隅丸方形を呈す。出土遺物は山之口式土器の小片が数点と炭化米である。炭化米は遺構内全体から満遍なく見つかっており、南側中央付近にて粃塊が出土した。ST02内から見つかった炭化米は4升程度である。また、炭化米の粒形については短粒のものが多く、また、大きさは極小から小のものが多く見受けられた（第4図）。

ST05は調査区北側の遺構集中域に位置し、規模は約5.8×5.4m、溝幅0.8m～1m、深さ約0.5mの隅丸方形を呈す。遺構内からは土器片及び炭化米である。炭化米はST02同様検出面から遺構底部にわたり出土している。

ST03・04とST06～08は調査区南西に集中して見られた。ST06の規模は約5.4×5m、溝幅0.6m深さ0.3m～0.4mの東側が開くコの字形を呈し、溝が1周しない。北東の隅より甕が出土している。またST04によって切られている。

ST07はST06の東に位置し、ST08の北面を切るように造られている。規模は約5m×6m、溝幅0.8m～1m、深さ0.4mの隅丸方形を呈す。溝の南東からは土器がまとまって出土した。

M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W | X | Y | Z



第3図 A地点遺構配置図

## ・土坑

その他の遺構として土坑が挙げられる。弥生時代に属すると考えられる土坑はSC79・80・81・82・83・90の6基で、調査区北側に集中する。

SC79・80は並んで検出され、3m×2m程の楕円形を呈し、深さが約1m弱と同規模のものである。土坑内には土器片が多く入っており、特にSC80からは壺が1個体分出土している（写真14）。また、SC79は土坑底部に未焼成の粘土が見つかった。用途・機能は不明である。

SC82・83・90はほぼ東西同軸に並んで見つかった。大きさはSC82が2.5m×1.8mの楕円形で段を持ち深さは約0.6mである。床部分が赤くなっており、朱が残されていた可能性がある。また、床面より鉄製品が出土している。SC83はSC82よりやや小ぶりで、1.6m×1.4mの楕円形で深さ0.6mとなっている。SC82が全体的に2段に掘り込みテラスを持つのに対し、SC83は北側のみに段を持ち南側が袋状に膨らむという特徴を持つ。やはり床面が赤く、また、鉄製品が出土している。SC90はSC82・83の主軸が東西であるのに対し南北となっており、また、大きさも1.2m×0.7mと小ぶりである。やはり床面が赤くなっていたが、鉄製品等の出土は見られない。これらのことからSC82・83・90については墓の可能性も考えられる。

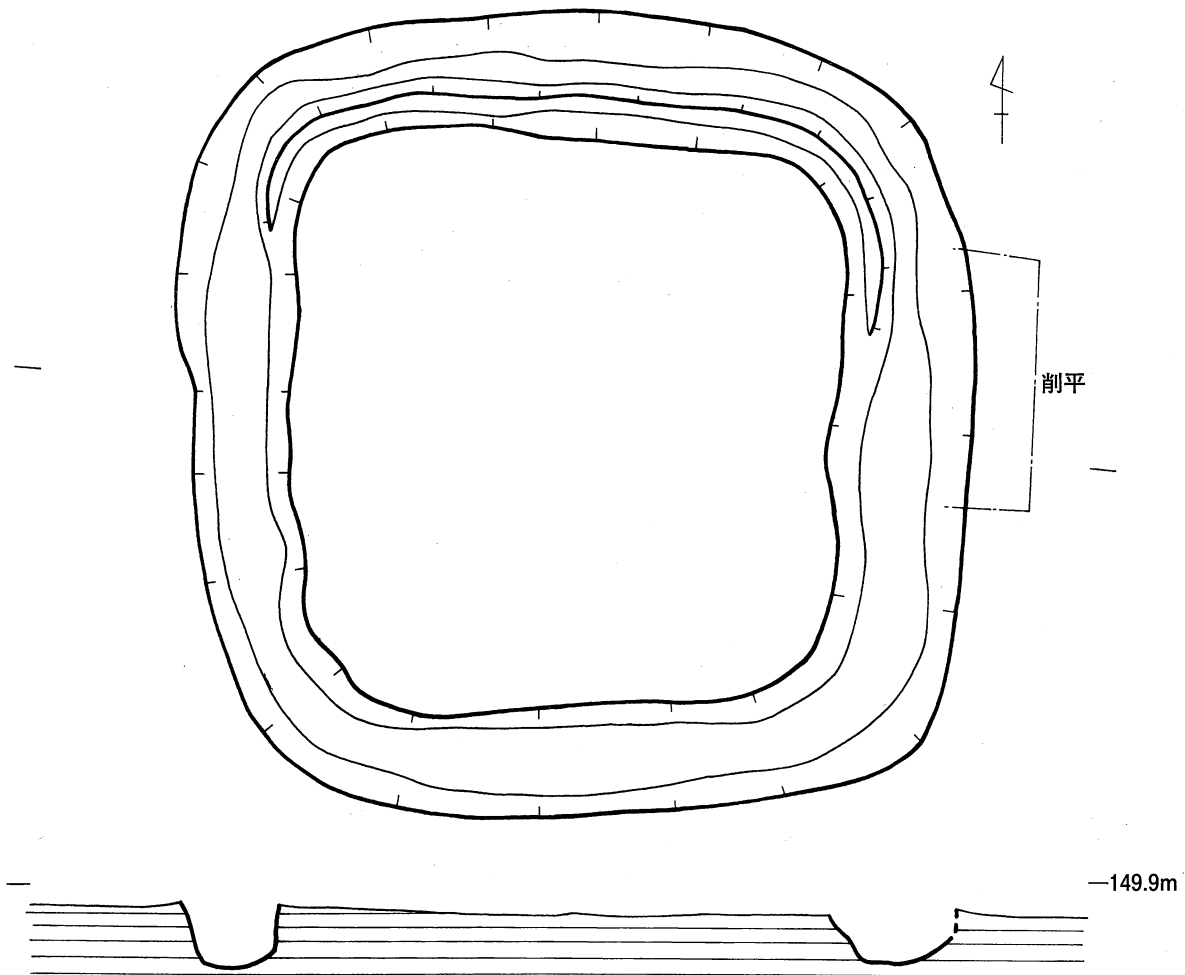
## 周溝状遺構出土の炭化米について

平田遺跡A地点での調査の成果の一つとして、周溝状遺構から炭化米が出土したことが挙げられる。これまで都城市では平田遺跡を含め8遺跡33基の周溝状遺構が見つかった（H16年3月31日段階）、周溝状遺構内から炭化米が出土したのは初めてである。また、県内を見てみても、川南町所在の湯牟田遺跡を含め2例である。また、九州でみても例はない。

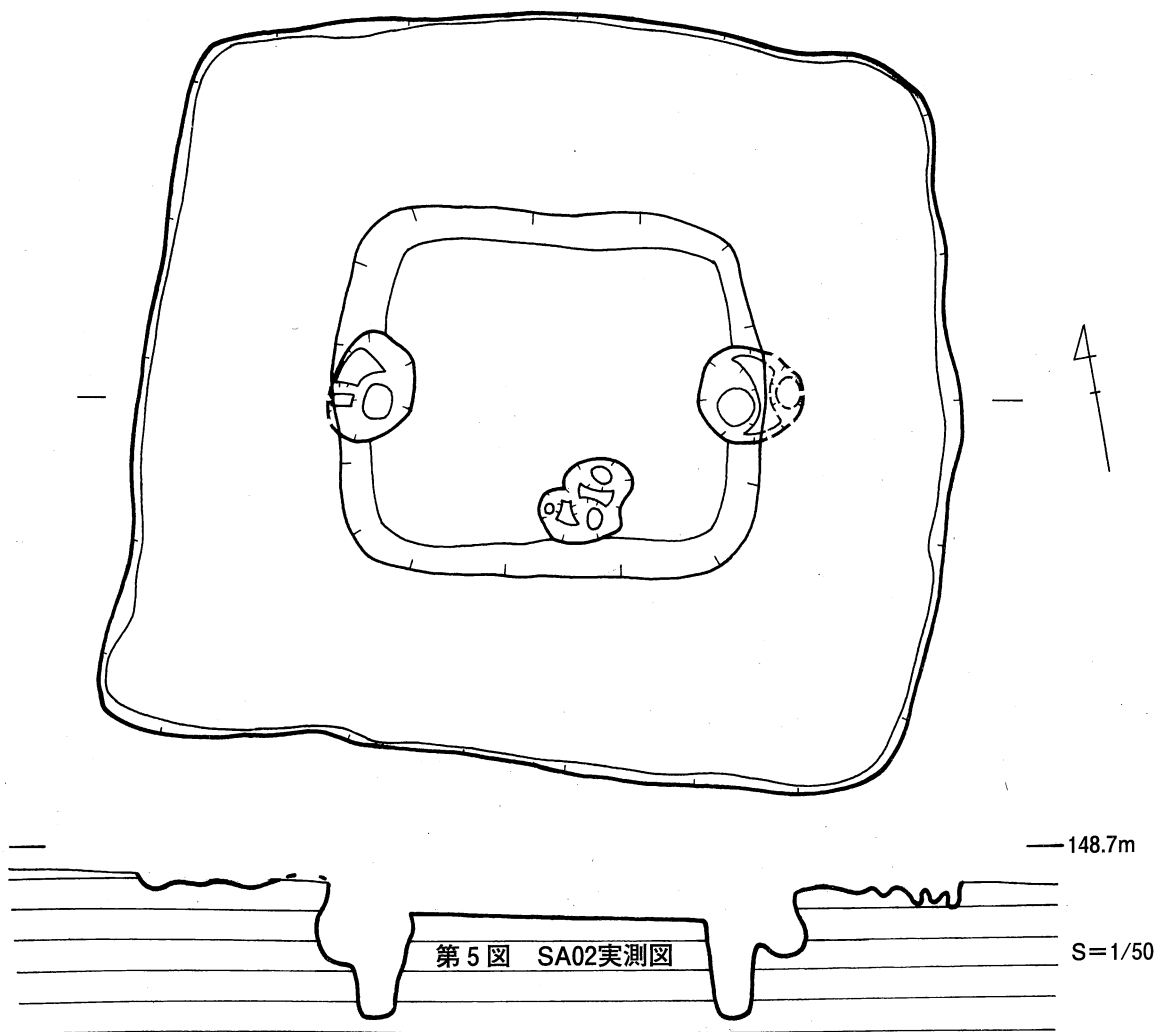
その理由の一つとして、現在のところ周溝状遺構の機能が限定されておらず（お墓か祭祀の場など）、また炭化米が出土するのは貯蔵穴や住居といった場所という認識が強かったため、周溝状遺構内に炭化米が残されるという認識がなかったことが挙げられる。ただし、平田遺跡の周溝状遺構から炭化米が出土したからといって、全ての周溝状遺構に炭化米が存在するというわけではないといえる。今後、周溝状遺構における炭化米の存在を念頭に置いた上で調査を行った結果、炭化米が出土するのであれば、周溝状遺構と炭化米の関連性を検討していく必要があるであろうし、出土しないのであれば、平田遺跡では偶然か必然か、炭化米が残される状況にあったと判断していかなければならないだろう。いずれにしても、周溝状遺構内における炭化米の存在の可能性を認識する機会となったといえる。

また、今回の調査の大きな問題点として、平田遺跡では遺構の掘り下げと同時に炭化米を肉眼で見つけるといった作業を行った。そこで、炭化米にのみ意識が集中し、その他の炭化米以下の小さな穀物類の存在を検討していない。現在整理作業の中で採取した土を分析中であるが、今のところ炭化米以外の穀物類は見つかっていない。調査方法としてST05では、炭化米の出土状況を検討するために1点1点座標を抑えるという作業を行ったが、遺構内全体から出土するという状況であった。これとあわせてベルト部分の土を10cm角に切り、その中の個体を数えるという作業で垂直の密度分布を得ようとしているが大変な時間と労力がかかっている。また、掘り下げに膨大な時間を要したことは言うまでもない。

今後は炭化米の有無を確認後はポイント採取で分析を行う必要性を痛感している。現段階では周溝状遺構と炭化米の関係について言及することはできない。今後の調査例の増加を待って検討していかなければならない問題と考える。



第4図 ST02実測図



第5図 SA02実測図





1. 土層堆積状況(調査区西壁)



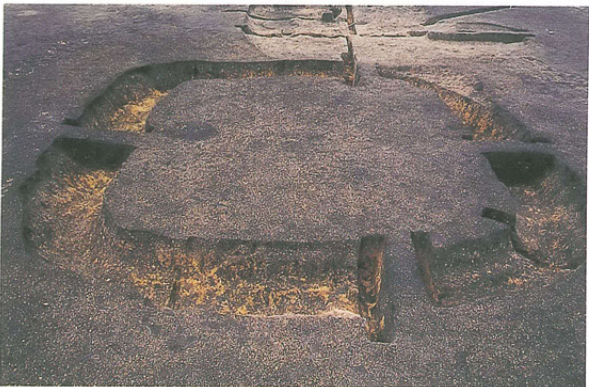
2. 北西部遺構検出状況(西南から)



3. SA18 完掘状況(南から)



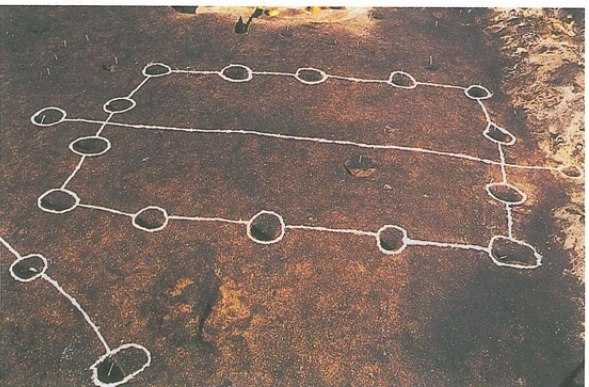
4. SA27 完掘状況(北東から)



5. ST02 完掘状況(北から)



6. ST03・04・06・07・08 完掘状況(奥から03・04・06・07・08)(南東から)



7. SB05 半掘状況(南から)



8. SC79(左)・80(右) 遺物出土状況(南から)





9. ST07 出土 甕



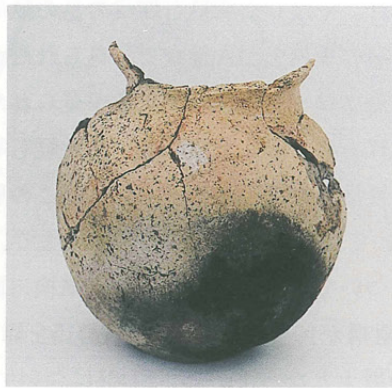
10. SA18 出土 鉢



11. SA24 出土 鉢



12. SA18 出土 長頸壺



13. ST07 出土 壺



14. SC80 出土 壺



15. ST03 出土 器台



16. SA23 出土 ミニチュア土器



17. SA04 出土 土製紡錘車



18. SA27 出土 石包丁



19. SA16 他出土 土製勾玉

### 第3節 B地点の調査

高規格道路部分（宮崎県埋蔵文化財センターが平成15・16年度に発掘調査を実施）を挟んでA地点の東側にあたる地点で、調査面積は約6,200㎡である。縄文時代早期・晩期、弥生時代、古代、中世の遺構・遺物が見つかった。

調査区のほぼ中央に西から東にかけ深い谷が走っており、谷の南側の高まりに弥生時代の遺構が集中し、谷底部分および谷の北側、調査区北東に中世の溝状遺構が集中し、古代は谷底から谷の北側部分に遺物の集中が見られ、掘立柱建物跡・溝状遺構・道路状遺構は谷を挟んで南北の高まりに見られ、調査区中央の谷部分では掘立柱建物跡・焼土跡・集石状の遺構が見つまっている。

B地点の土層堆積状況は調査区中央の谷部分を除いては、VI層の御池軽石層まで削平され良好とは言えなかった。土層の状況はA地点とほぼ同じで、谷部では表土・旧耕作土の下にIII層の文明軽石が堆積していた。A地点と同じく半月状に等間隔で見られ、やはり文明軽石埋没の畝の畝間部分と考えられた。その直下に古代から中世の遺物包含層と考えられるIV層の黒色土がA地点では見られたが、B地点ではこの黒色土の上部に御池軽石およびアカホヤ火山灰と思われるブロックを含む黒色土が見られた。これについては現在検討中であるが、谷南部に中世の大溝があるためこれを掘り返した際の土（御池軽石等）が谷部に流れ込んだ可能性と、中世段階で大規模な谷の造成が行われた可能性の二つが挙げられる。この層をB地点ではIVa層とし、A地点に見られたIV層をIVb層とした。V層についてはA地点と同じく黒褐色土で、より褐色を帯びる面が遺構検出面である。IV層が削平されていない部分については、中世・古代の遺構検出面はV層上面である。

B地点における中世の遺構は溝状遺構が10条検出された。SD15を除く9条については何れもIII層の埋没が見られた。SD15についてはIVa層の埋土となっている。SD01については西側に隣接する高規格道路部分から東へと伸びており、硬化面を幾層も併せ持つ。SD06は谷部北側から南北方向に伸び、谷部付近で緩やかに東へと伸びていく。SD06は幅2～3m、深さ約2.5mでY字状に掘り込まれ溝底部の幅は約0.5m弱である。SD06・07・08については小高い丘陵部分を分断するように造られており、SD01・09・10・11・13については急斜面の落ち際に造られている。このほか掘立柱建物跡が1棟検出されている。

古代に属すると思われる遺構は、掘立柱建物跡21棟、溝状遺構3条（SD04・05は道路状遺構の側溝とした場合）、道路状遺構2条、焼土跡3基（集石状の遺構を伴うものを含む）が挙げられる。谷部から北側にかけては東西に伸びる溝状遺構と2間×3間、2間×4間（3間×4間の総柱の可能性も有る）といった大型の掘立柱建物跡と焼土跡・集石状の遺構が認められ、谷南部の高台部分では1間×1間、1間×2間といった掘立柱建物跡が側溝を持つ道路状遺構の北側に集中して認められた。

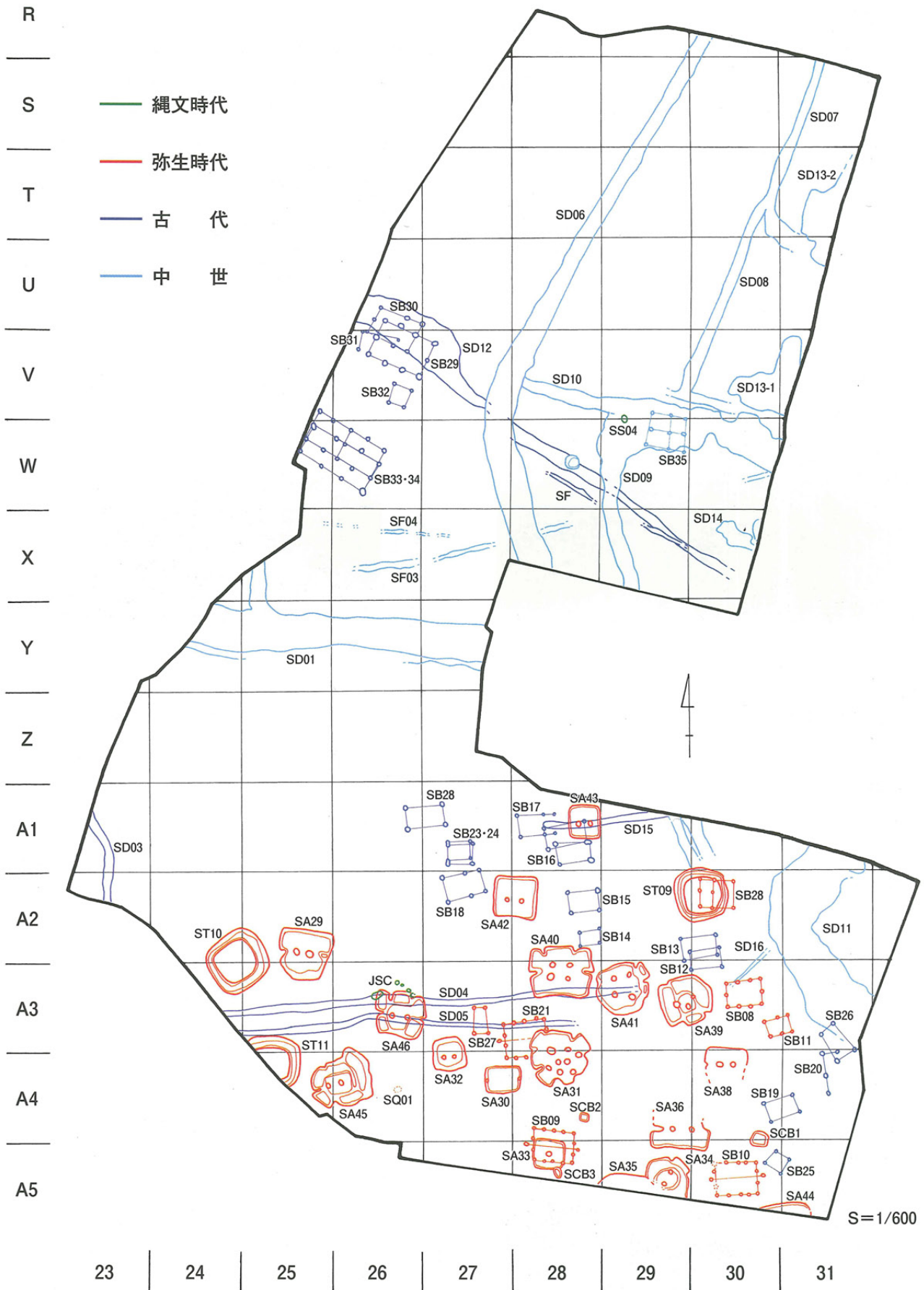
弥生時代の遺構は、竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡6棟、周溝状遺構3基が挙げられる。何れも調査区南側の高台部分に集中し、方形・円形・花卉状と形態、大きさとも様々である。特にSA32からは瀬戸内系の凹線文土器が出土している。住居跡内からは中期末から終末にかけての土器が出土している。削平を受けている住居跡が多く、遺物の残存状況も良好とはいえない。

掘立柱建物跡は棟持柱の3間×4間のものが3棟、2間×3間が1棟、1間×2間などがある。竪穴住居と切り合い関係にあり、SB09についてはSA33が埋没した後に建てられたと考えられる。

周溝状遺構状遺構からは現在のところA地点で見られたような炭化米の出土は認められていない。

縄文時代は早期と晩期の遺構と遺物が見つまっている。晩期は調査区南側のSA46の北側に打製石斧を埋納したと思われる土坑が大小5つ見つまっている。土坑内および周辺から突帯文が少量ではあるが出土している。

縄文早期の遺構は桜島噴出のP11を含む層（X層）より下位のXIからXIIにかけて検出されている。SD09内に集石が1基、散石状に礫を含む土坑が10基ほど見つまっている。土坑内および周辺からは貝殻文円筒形土器、石鏃等が出土している。土坑の位置する地形は北西から南東に向かう傾斜面の落ち際付近にあたる。



第6図 B地点遺構配置図





20. 平田遺跡 A地点(左)・B地点(右下)・C地点(右上)・全景(南から)



21. B地点 全景(南から)



22. 中世 SD01・02(東から)



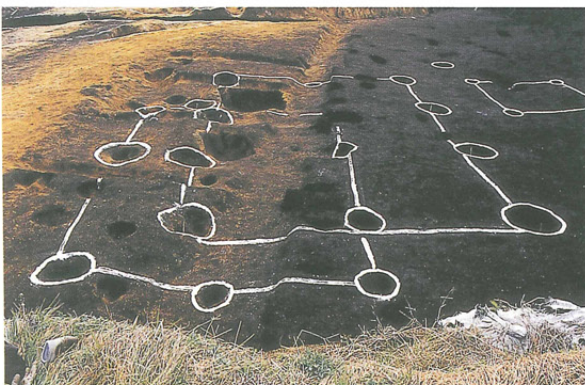
23. 中世 SD06(南から)



24. 古代 SD05(左)・SD04(右)(東から)



25. 古代 小型壺出土状況

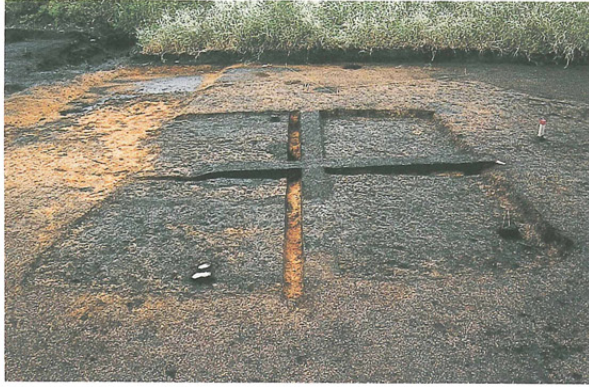


26. 古代 SB30(左)・SB29(中央)・SB32(右)(西から)

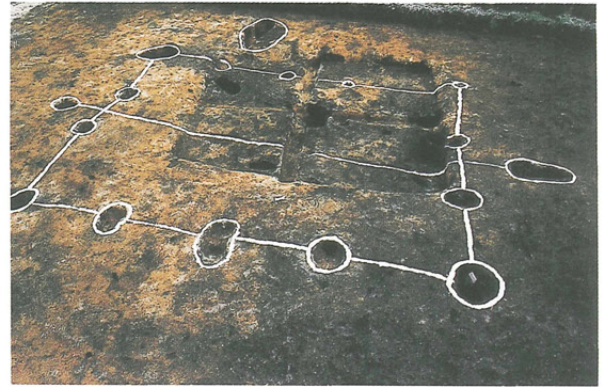


27. 古代 SS01(南から)

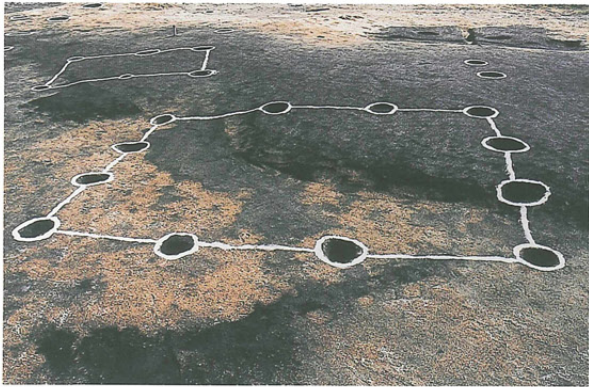




28. 弥生 SA42(東から)



29. 弥生 SA33及びSB09(北から)



30. 弥生 SB08(手前)・SB11(左奥)



31. 弥生 土器溜まり



32. 弥生 ST10(南から)



33. 弥生 ST10 土器出土状況



34. 縄文晩期 土坑



35. 縄文早期 SS04



### 第3節 C地点の調査

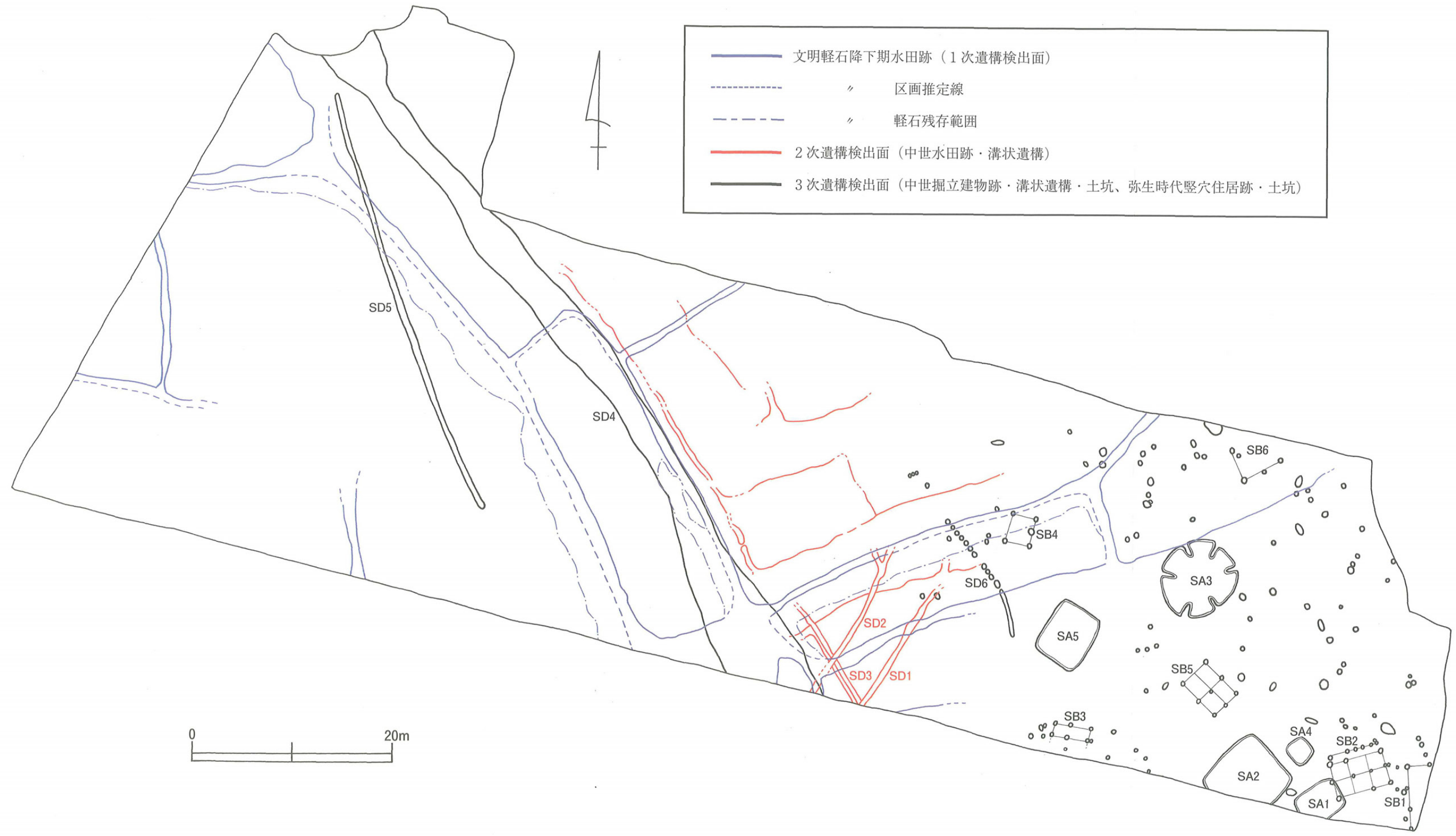
平田遺跡C地点は、横市川右岸の沖積段丘上に位置している。標高は141m前後で、すぐ南側の低位段丘上に位置するB地点よりも3～7m程度低くなっている。ここで、県営のは場整備事業に伴い6,200㎡が緊急発掘調査の対象となり、平田遺跡C地点として調査を実施した。調査期間は平成16年4月9日から平成17年3月31日までである。

平田遺跡C地点の発掘調査では、中世および弥生時代の遺構・遺物が検出されている。これらのうち竪穴住居跡（弥生時代後期）・掘立柱建物跡（中世）および土坑・ピットは、調査区の東側において同一面上で中世と弥生時代のものが混在して検出された。これは、遺構の集中していた調査区東側が地形的に最も高いところにあり、遺構の検出面が表土の直下であったことに起因するものである。そのため土坑の中には遺物が出土しておらず弥生時代かあるいは中世いずれの時期の所産か判断が困難なものが多数存在する。

検出された遺構のうち、まず中世のものを挙げると水田跡2面、掘立柱建物跡6棟、溝状遺構5条および土坑等が挙げられる。表土直下で検出された水田跡は、文明年間に降下した桜島起源の軽石（Ⅲ層）に覆われていた。この文明軽石層には直下のⅣ層がブロック状に入り込んでいることから、プライマリーな堆積ではなく、このⅣ層と共に攪拌されたものと理解した。これは火山灰の降下後に復旧のための転地返しのような作業が行われたことを示すものであろう。また、Ⅳ層の掘り下げ作業中に円形やハート形を呈し、細かい砂や軽石の堆積した小さな窪みが検出された。その形状や面的に広がる状況から、水田耕作の際に使われた家畜（牛）の足跡である可能性が考えられる。しかしながらこの面で畦畔は確認できておらず、水田跡であると確定するには根拠が乏しい。2枚目の水田跡は、やはりⅣ層中で確認されており、直下のⅥa層が擬似畦畔状に検出されている。ここで畦畔と考えられるような明確な高まりは土層断面で確認できたのみだが、先述のように擬似畦畔状に面的に検出されたため水田跡として認識した。出土遺物を見てみると、量は少ないが12～14世紀代の陶磁器が出土しており、やや時間幅が認められる。また、該期の掘立柱建物も6棟検出されている。全体像が分かるものは、1×1間が1棟（SB04）、2×2間が1棟（SB05）、2×3間が1棟（SB02）の3棟を数える。全体像は分からないものの、他の3棟もピットの配列から掘立柱建物跡として認識した。SB03は掘立柱建物の底部分であると考えられる。また、調査区南側のほぼ中央から北西隅にかけて南北に縦断する長さ約76m、最深部で約2.0mを測る溝状遺構（SD04）を検出している。埋土の最上部には基本土層のⅤ層が堆積しており、この層中からは土師器皿・坏が出土している。これらの遺構の他には土坑・ピットが検出されている。

弥生時代の遺構は調査区の東側のみで検出されている。後期の所産であると考えられる住居跡5基の他は土坑・ピット等が検出されているのみである。SA01は4.6×3.5mの隅丸方形を呈する住居跡である。プランの1/5は調査区外に延びる。ここから出土したもので、特筆すべき遺物としては石包丁が挙げられる。SA02は一部が調査区東側の土層確認用トレンチ（南トレンチ）にかかる7.1×7.0mの方形を呈する住居跡である。プランの約1/4は調査区外に延びる。埋土中より石包丁が出土している。SA03は径7.8mを測り、間仕切りをもつ。埋土中より小玉が一点出土している。SA04は2.4×2.3mの方形を呈するやや小型の住居跡である。床面で検出したピット中には多量の粘土が詰まっていた。SA05は6.0×5.0mの方形を呈する住居跡である。床面近くよりミニチュア土器が出土している。

出土遺物に関しては、縄文時代後期～中世までの遺物が出土している。中でも磨製石包丁が包含層から4点とSA01から1点、SA02から2点、SA03から1点の合計8点が出土していることは注目される。現在までに平田遺跡においては、弥生時代中期から後期にかけての住居跡は検出されているものの、該期の水田跡は確認されていない。しかし、今回のC地点の調査において出土した多数の石包丁は、平田遺跡の周辺でも水田を営んでいた可能性が高いことを示す資料といえる。



第7図 平田遺跡C地点遺構配置図 (S=1/400)





36. 調査区全景 (中世水田跡検出状況)



37. 調査区西側土層断面



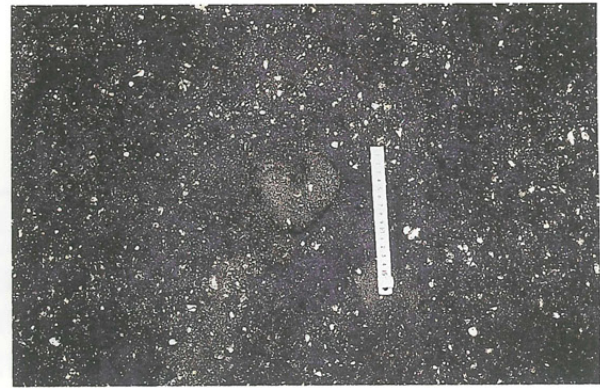
38. 中世水田跡検出状況



39. 中世水田区画完掘状況



40. IV層中検出家畜(牛)の足跡



41. 家畜(牛)の足跡検出状況



42. 家畜(牛)の足跡完掘状況①



43. 家畜(牛)の足跡完掘状況②





44. 中世水田跡②および溝状遺構



45. IV層中出土鉄製品



46. SA01 出土磨製石包丁



47. 包含層出土磨製石包丁



48. SA01(左)・SA04(中央)・SA02(右) 検出状況



49. SA01 検出状況



50. SA03 検出状況



51. SA04 検出状況



## 報告書抄録

書名	横市地区遺跡群 <sup>ひらた いせき</sup> 平田遺跡A地点・B地点・C地点					
副書名	横市地区県営経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告書					
巻次						
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第68集					
編著者名	栗山葉子・山下大輔					
編集機関	都城市教育委員会					
所在地	宮崎県都城市菖蒲原19-1					
発行年月日	2005年3月25日					
所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
平田遺跡 A地点	みやざきけん 宮崎県 みやこのじょうし 都城市 みなみよこいちちやう 南横市町 あざ 字和田	31° 44' 47"	131° 02' 28"	H15. 4. 10～ H16. 3. 31	14,000㎡	農業基盤整備事業 (県営ほ場整備事業)
B地点		31° 44' 45"	131° 02' 35"	H16. 4. 9～ H17. 3. 31	6,200㎡	
C地点		31° 44' 49"	131° 02' 39"		6,200㎡	
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
平田遺跡 A地点	集落跡	弥生時代 古代～中世	竪穴住居跡・周溝状遺構 掘立柱建物跡・土坑 掘立柱建物跡・土坑 道路状遺構	弥生土器 磨製石鏃 土師器		
B地点	集落跡	縄文時代 弥生時代 古代 中世	土坑・集石 竪穴住居跡・周溝状遺構 掘立柱建物跡・土坑 掘立柱建物跡・道路状遺構 溝状遺構 溝状遺構・道路状遺構	縄文土器 弥生土器 磨製石鏃 土師器・陶磁器 鉄器・鉄滓 陶磁器		
C地点	水田跡 集落跡	中世 中世 弥生	水田跡・溝状遺構 掘立柱建物跡・土坑 竪穴住居跡・土坑	陶磁器 土師器 弥生土器 石包丁		

都城市文化財調査報告書第68集

横市地区遺跡群

平田遺跡A地点・B地点・C地点

横市地区県営経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告書

2005年3月

編 集 宮崎県都城市教育委員会

発 行 〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町19-1  
都城市役所菖蒲原町別館

TEL(0986)23-9547 FAX(0986)23-9549

印 刷 株式会社みやこ印刷

〒885-0026 宮崎県都城市大王町51-22  
TEL(0986)23-1682 FAX(0986)22-1682